地域の魅力セレクション2009相次ぎ開催

出会う！ふれあう 地域の魅力 キャンペーン

「地域の魅力セレクション2009」の一環として、魅力ある地域産品と首都圏マーケットとの連携を図るイベントが、東京・新宿の小田急百貨店新宿店をはじめ小田急グループ各社と横浜市の横浜赤レンガ倉庫、東京都千代田区丸の内の丸の内ビルディングマルキューブで相次いで開かれた。

スイーツ中心に出品
丸ビルに11社が展示・販売

7月10日から12日まで丸の内ビルで開催されたのは、経済産業省・中小企業庁が取り組む「出会う、ふれあう、地域の魅力キャンペーン」の関連イベントで、テーマは「ワンランク上のご褒美」。全国から11社が展示・販売、サラリーマンやOLなどで賑わった＝写真。

出品されたのは、OLなど女性を意識してかスイーツが中心。チーズケーキやプリンのほか、和菓子などちょっと高級感のあるスイーツが各ブースに並び、会場は甘い香りに包まれ、足を止めて試食し買い求める光景が見られた。

首都圏各地で行われてきた「地域の魅力セレクション2009」は、その総集編として「魅力、体験、再発見！　きっと出会えるニッポンセレクション」をテーマに、東京・丸の内の東京国際フォーラムで7月31日から8月2日まで開催される。

丸の内ビルでの出展企業は次のとおり。

▽きのとや（札幌市）＝北海道ハスカップケーキ▽大金（旭川市）＝北海道産原料を使ったピクルス、飲む酢、菓子▽ガトーよこはま（横浜市）＝よこはまチーズケーキ▽四季の定期便（新潟県三条市）＝カクテルレシピで作る季節のコンフィチュール▽BACIO D UE有限責任事業組合（山梨市）＝干し柿とバニラのアイスクリーム▽シードライフテック（滋賀県長浜市）＝発芽大豆シュークリーム▽西山酒造場（兵庫県丹波市）＝栗焼酎入りケーキ▽紅梅園（和歌山県田辺市）＝梅干し、梅ジャム、梅シロップ▽鈴木屋（岡山市）＝どら焼き、作州飴▽ダイニング&バー　ジャンナ（岡山市）＝ジャンナのベトナムぷりん▽芭蕉庵（岡山市）＝羊かん

東北の地域産品並ぶ
小田急グループ39店舗で

小田急グループは小田急百貨店新宿店（東京都新宿区）など39店舗で、展示販売会「小田急がセレクトした日本の食と文化　東北篇」を7月8日から21日まで開催した。小田急グループの「日本の素敵、再発見」プロジェクトの一環として昨年に続く第2弾で、東北地方などの中小企業34社が参加した＝写真。

「出会う、ふれあう、地域の魅力キャンペーン」として、経済産業省・中小企業庁、中小機構も共催している。

展示即売会が開催されたのは新宿店（13日まで）のほか▽小田急商事のOXストア（28店舗）▽小田急リゾーツの3ゴルフ場内のレストラン（小田急西富士ゴルフ倶楽部、小田急藤沢ゴルフクラブ、富士小山ゴルフクラブ）▽ホテル小田急のハイアットリージェンシー東京の和食レストラン（ombrato）▽小田急レストランシステムのさわらび庵（和食）、わらびや（そば酒処）つづらお（そば処、4店）の39店舗。

地域資源バートナー企業となった小田急グループは昨年夏にも「日本の世界遺産をめぐる～日本の素敵なお酒フェア」を開催した。今回はお米や大豆の産地で、豊かな発酵文化を持つ東北地域の地域産品にスポットを当てた。

地域資源活用、農商工連携の認定企業に対する新商品・新サービスの販路開拓を支援する催しだが、すそ野を広げようと認定企業以外に信用金庫の取引企業も参加し、埼玉県からも1社加わった。冷凍寿司や昆布醤油、牛タン、焼きタコ、生キャラメルなどの食品のほか曲げわっぱ、テーブルウエア、鋳物のティーポットなど多彩な商品が揃った。新宿店では食品は11階の催事場で、非食品は2階のサンドリーズアレー特設会場で合計30社がブース出展した。

大型イベントに密着作戦で
全国から33社出展

横浜赤レンガ倉庫

経済産業省・中小企業庁主催の地域産品の展示・販売会「出会う、ふれあう、地域の魅力キャンペーン　地域の魅力セレクション」の一環として7月18日から20日まで横浜市中区新港地区の横浜赤レンガ倉庫イベント広場で「歴史を感じ、ふるさとを味わう」をテーマに食関連の地域資源活用、農商工連携事業で商品化した商品を中心に33社が個性豊かな地域産品を紹介、販売した＝写真。

会場となった赤レンガ倉庫周辺では、横浜開港150周年記念イベント「開国博Y＋150」ベイサイドエリア会場に隣接していることに加え、18日から横浜港および周辺地域では「海フェスタよこはま」が開催されて全国各地から観光客が訪れたこともあり、「地域魅力セレクション」にも観光客らが押しかけ、大型イベントに密着して開催する中小企業庁の〝小判ザメ作戦〟の集客戦略は成功を収めた。

赤レンガ倉庫展示・販売会に参加したのは、北海道から東北、関東、東海・中部、北陸、中国、四国、九州、沖縄の全国から首都圏の消費者やバイヤー、流通業者とのマッチングや販路開拓・拡大をめざして出展した。中でも山形県川西町・本田食品の「米沢牛100%メンチカツ・コロッケ」は、揚げたてを試食・販売したため行列ができる人気ぶりとなった。また福岡県・高橋商店の「新感覚液体調味料・ゆずすこ」、山口県・クレアツーワンの「手造り黒ごま油」などなかなか手に入らない商品などに人気が集まった。

「不況こそ革新のチャンス」
川崎で新連携創出フォーラム

経済産業省・中小企業庁、関東経済産業局、川崎市、中小企業基盤整備機構（中小機構）関東支部主催の「新連携創出フォーラム2009inかわさき」が7月9日、川崎市高津区のかながわサイエンスパーク（KSP）で開かれた。8日から10日まで同会場で開かれた先端技術見本市「テクノトランスファーinかわさき2009」（主催・神奈川産業振興センターなど）の同時開催イベントとして開催された。

最初に、吉澤雅隆・関東経済産業局地域経済産業課長が「中小企業の景況はまだ厳しい状況にある。フォーラムを通じてアイディアを持ち寄り挑戦する中小企業のビジネスのヒントにして欲しい」と開会挨拶した。続いて「新連携事業の概要」と柳沢剛・中小機構関東地域活性化支援事務局チーフプロジェクトマネージャーによる「新連携認定事例紹介」が行われ、7つの成功事例を紹介した。

基調講演は、BSジャパン「こちら経済編集長」で編集長兼キャスターを務める山口義行・立教大学経済学部教授が「中小企業の連携が未来を開く」と題して講演した＝写真㊤。山口教授は、「米国のサブプライムローンに端を発した世界不況に何を学ぶのか。経営者は世界に目線を大きく、世の中どうなっているかを知らなければならない」としたうえで、「中小企業は大手企業の言いなりになっているようなレベルを変えないと強じんな中小企業はつくれない」と強調した。

このため山口教授が代表を務め7人の専門家が出資して設立した株式会社「中小企業サポートネットワークスモールサン（Small Sun）」を設立したねらいを、「それぞれ別々に活躍している専門家がネットワークを組み中小企業支援に取り組む。活動の第1は勉強会、第2はネットワーク活用、第3は大学、行政、金融機関などとの連携。会費は月額2000円で誰でも入会できる」と参加を呼びかけた。

そして「経営とは問い続けることが仕事。何これの問いがイノベーションを生み出す源泉となる。不況こそ革新のチャンス。そのキーワードが新連携、〝つなぐ〟であり、新連携こそ不況を乗り越える中小企業経営の秘策である」とアピールした。

「テクノトランスファーに中小機構出展」

高度な先端技術や研究開発機能が集積する川崎市を舞台に開かれた「テクノトランスファーinかわさき2009」（主催・神奈川産業振興センター、神奈川県、川崎市）には、産業機器、環境・福祉・防災、企業ネットワーク、産学連携など5分野に121社120小間が出展、独創性に優れた新製品の展示・実演を通じ〝製品PR・販路拡大〟が展開された。

中小機構関東支部は、同展を後援するとともに、産学連携部門にブースを開設、同時開催の「新連携フォーラム2009inかわさき」と連携して中小機構のプロジェクトマネージャー（新連携）が常駐して中小企業者の相談に応じた＝写真㊦。

中小企業大学校だより
三条校校長　志賀　幸夫

中小企業大学校三条校は、新潟県・長野県の信越地域を対象に平成4年10月に開校し、16年が経過しました。

当校は、新潟県三条市の中心部から東に4㎞程離れた大崎山の中腹に立地し、校舎はレンガ色の少しモダンなデザインの建物で、周辺環境は緑豊かな自然に恵まれ、冬にはあたり一面銀世界となる四季がはっきりした地域です。

信越地域に根ざした人材育成
新潟大大学院とも連携協定

昨年度は、中小企業者等研修を41本（受講者数1329人）、中小企業支援担当者等研修4本、自主研修8本を実施しました。最近では、北陸自動車道でつながる石川県や富山県での認知度も徐々に高まり、両県からの受講も増えております。

3月には新潟大学大学院技術経営研究科と包括業務連携の協定を取り交わし、6月12日開講の「経営トップセミナーI〝技術力〟を活かすモノ作り企業が目指す道」において同大学院の教授らが講義を行い、協定締結後の取り組みを具体化させました。

当校が立地する新潟県中越地方は、「和くぎ」の生産から始まった洋食器、金属工具、明治初めの石油採掘に伴って発展した機械器具などの地場産業が集積しています。この地域特性を考慮し、製造業の課題に対応する研修を今年度は10本に拡充（原価管理などのテーマを追加）しました。先進工場見学や受講企業の製造現場に出向きアドバイスを行う研修、製造業が地球環境に対応したモノ作りを行うために、製品開発や生産管理の理論と競争戦略の理論を融合させた「グリーン技術経営」（信州大学経営大学院との共催）をテーマにした研修などが特徴としてあげられます。

また、地域行事への参加と交流、施設の開放などの地域貢献を心がけ、さらに受講企業経営者の会、経営管理者養成コースOB会を通じておも客様との関係構築にも努めております。

中小企業は厳しい経営環境が続くなか、足許の経営の舵取りにゆとりがないとの声がある一方、この時期にこそ人材育成をとの意欲ある経営者の方の声もあり、これを励みに、中小企業の皆様の経営に資するよう、職員一同、業務に取り組んで参る所存です。

三条校の建物外観＝写真㊤と企業訪問アドバイス風景＝写真㊦

農商工連携研究会が報告書まとめる
三つの「力」の強化を
地産地消の推進など提言

経済産業省と農林水産省の「農商工連携研究会」（座長＝門間敏幸・東京農業大学国際食料情報学部教授）は、報告書「地域ぐるみの農商工連携の促進に向けて」をまとめた。昨年7月の農商工等連携促進法施行からの取り組みの現状を報告、今後の課題と方向性について①「マーケティング力」②農商工連携に取り組むための「経営力」③連携の面的な拡大促進による「地域力」―の三つの力の強化を指摘し、具体策を提示した。

研究会は昨年12月から今年5月まで7回の会合を開いて①地域活性化を実現する上での農商工連携の意義②農商工連携による流通等商工連携の面的な拡大―などについて検討。委員には大手流通チェーン役員、百貨店・生協幹部などのほか尾﨑正直・高知県知事、木内博一・農事組合法人和郷園代表理事なども加わった。

「農林水産業と関連産業の『成長産業』化に向けた環境は整いつつある」とする報告書によると、昨年度末までに190件の計画を認定。昨年度は両省合わせて200億円以上、今年度は約334億円を予算計上、さらに今年度第1次補正予算で植物工場、販路開拓支援などを盛り込んでいる。これまでにフォーラム・セミナーを43回開催（延べ5000人出席）したほか、農商工連携88選を選定し、中小機構は「農商工連携型地域中小企業応援ファンド」に総計500億円程度の資金枠を確保して都道府県に貸し付け、農商工連携ファンドを創設している。

これらの取り組みで川上の農林水産業をはじめ川下の商工業の収益が拡大し、消費者への多様な農水産物・食品が提供されるなどの便益が向上した、という。地域経済の活性化、農商工連携の面的な拡大を進める」ため、3つの「力」の強化を指摘し、今後の方向性として重点的に支援する方策を示した。

「マーケティング力」の強化では、▽農林水産業者の取り組みにとどまらない地域における農商工連携の面的な拡大を進める」ため、3つの「力」の強化を指摘し、今後の方向性として重点的に支援する方策を示した。

その上で「個別の事業者の取り組みにとどまらない地域における農商工連携の面的な拡大を進める」ため、3つの「力」の強化を指摘し、今後の方向性として重点的に支援する方策を示した。

「マーケティング力」の支援強化▽農林水産業者と流通業者など行政と商工行政の連携による研究開発体制の強化▽産地・産業者と流通業者など行政と商工行政の連携による研究開発体制の強化▽産地・産業者の市場ニーズの把握▽商品の魅力向上に向けた研究開発支援―などをあげた。

「経営力」の強化では、▽生産者・事業者の経営ノウハウ・知識の習得▽戦略的に連携に取り組める人材の育成▽企業などのOB人材の有効活用―などが必要とした。

「地域力」の強化では、▽成功事例などを活用した積極的な普及・啓発▽地域ぐるみの農商工連携に対するソフト面、ハード面からの支援強化▽農林水産業者の取り組みにとどまらない地域ぐるみで戦略的に取り組む事例を「地域ぐるみ農商工連携○選」としてまとめる―などの具体策をあげている。

最後に「具体的なアクションに向けて」とした政策提言を行っている。

その中には▽直売所や学校給食・社員食堂などによる地産地消の推進▽海外の見本市出展などで販路開拓を積極的に実施▽世界貿易機関（WTO）の議論の進捗状況をみながら、農産品に対する地理的表示を与える「地理的表示制度」（GI）の整備・検討▽植物工場の普及・拡大▽地域ぐるみで戦略的に取り組む事例を「地域ぐるみ農商工連携○選」としてまとめる―などの具体策をあげている。

三越本店にR・inコーナー
「涼」感じる100点を販売

Rin

中小機構運営の地域資源テストマーケティング・ショップ「Rin」は、7月15日から21日まで東京都中央区日本橋室町の日本橋三越本店にコーナー出店した＝写真。

5階のリビング用品売り場にある「和」を提案する「J・スピリッツ」の一角に、「五感で感じる夏小物」と題して、取扱商品の中から夏に向けて「涼」を感じられる品約100点を選んで展示販売した＝写真。

江戸べっ甲や小枝印鑑

東京伝統工芸の6社が出展

「東京伝統工芸展～の実演～」が7月16日から19日まで中小機構が運営する「Rin」3階イベントスペースで開かれた。手づくりの素朴な味わいと優れた技能を受け継ぐ6社の伝統工芸品が展示され、訪れた来場者の関心を集めた＝写真。

出展したのは、「江戸べっ甲」「小枝印鑑」「藍染小物」「江戸組紐」「浮世絵木版画」「春日部張子」の6店。いずれも職人による手づくりの品物ばかり。海がめのタイマイを材料にした江戸べっ甲では、おしゃれな眼鏡フレームやペンダントなど、本べっ甲による味わい深い品物を出品。また、茶の木や欅、竹など20種類の小枝を使った小枝印鑑では、似顔絵や干支などをデザイン、サイン的な機能を持たせた手づくりならではの印鑑を実演販売した。

べっ甲製品を出展した田中淳功さんは「東京の職人による本物の手づくりの良さを、こうした機会をより増やしてPRしていきたい」と話していた。

がんばる中小企業
「なんでも相談ホットライン」
☎0570-009111
独立行政法人　中小企業基盤整備機構